

街道、宿場町について

17世紀初め、徳川幕府（1603～1868）は「五街道（ごかいどう）」の名で知られる街道網を設けた。池田家（いけだや）が面していた三国（みくに）街道は、江戸（えど）（現在の東京）から越後（えちご）地方を通して日本海（にほんかい）まで続いていた街道で、この五街道における非公式な支道となっていた。街道は、佐渡島（さどがしま）の金山から来た役人や、参勤交代を行う大名たちにとっての重要なインフラであり、大名とその大勢の家臣たちの行列は三俣（みつまた）などの宿場町に好況をもたらした。これらの町には旅行者向けの宿泊施設と商品の一時保管施設があったためである。また宿場町は、旅人や商品を運ぶ馬や、手紙の迅速な配達を行う飛脚の立ち寄り地としての役目も果たしていた。

三俣はこの地域で最大の規模を誇る最も栄えた宿場町であり、本陣（身分の高い旅行者が使用することを認められた宿）が1軒と、予備の宿である脇本陣（本陣が埋まっている場合に交替で利用される宿）が3軒あった。脇本陣は、一般の旅行者や商人たちの宿泊施設としての役割も果たしていた。これらの4軒の宿を営んでいた各家族の長はいずれも村の名主で、この地域を取り締り、税を徴収する人たちであった。4軒のうち現在も残っている宿は、かつて脇本陣であった池田家のみである。三俣の関所は八木沢（やぎさわ）観音堂近くにあり、そこでは、地元の特産物が他の領地に運ばれることのないよう厳しい検問が行われていた。

1872年に公式の宿駅制度が廃止されると三国街道の交通量は減少し、本陣・脇本陣の客足が落ち込み、三俣の町は活気を失っていった。